校長荒木規夫から保護者・生徒皆様へのメッセージ【不定期コラム№30】R4 7/12

「私の第一声⑱」

【初めての家庭訪問】

私が最初に赴任した学校は、複数担任制をとっていました。担任と副担ではなく、2 人とも担任です。着任すぐの４月の終わり、私の相棒の先生は、宣言しました。「家庭訪問、全部のおうち、歩いて回るで！」

各学校では、生徒に緊急対応が必要になった時などのため、年度はじめに、住所を確認するとともに配慮が必要なことなどを保護者から直接教えていただける貴重な機会として、家庭訪問を実施しています。

確かにその学校の校区は、それほど大きくはありませんでした（三中校区は貝塚市の 2/3 の面積を占める広大な校区ですが…）が、限られた日数しかありませんから、能率を考え、車もしくは自転車で回るのが一般的です。私は相棒の先生の言葉にびっくりしましたが、もちろん先輩の言葉には逆らえないし、持久力にはある程度自信もあったので、2 人で歩いて回ることにしました。地区ごとに日程を設定し、細かい調整を保護者にお願いすると、何とか徒歩でも期限内に回ることが可能なスケジュールをつくることができました。

実際に歩き始めてみると、懐かしいもの、初めて見るもの、意外なものなど、たくさんのものに出会うことができました。

懐かしかったのは、私が「玉ねぎ小屋」と呼んでいた、木材の骨組みで屋根を支えて建っていて、壁はなく、収穫物を干したり、農機具を一時的においたりしている、畑の真ん中に建っている農作業用の小屋です。6 才まで住んでいた熊取にもたくさんあったので、秘密基地に使ったり、仮面ライダーごっこの悪の城に見立てて遊んだりしていて、よく怒られました。作物や土の香りが当時の思い出を蘇らせます。

初めて見たのは、だんじり小屋です。相棒の先生に、「何やと思う？」と示されたときは、何か大切なものをしまってある蔵のように見えましたが、それ以上は想像もできませんでした。6 歳まで住んでいた熊取では家の近くにはなく、25 年住んでいた泉北ニュータウンには、だんじりそのものがありません。私は赤坂台中学校 10 期生で、町の年齢と自分の年齢がほぼ同じ。自分の住んでいる町が、ご先祖様から積み重ねてきた文化の上に成立しているという感覚が全くありませんでした。だんじり小屋をきっかけに、相棒の先生から町の成り立ちなどを聴いていくと、興味深いことがいくらでも出てきました。

意外にたくさんあって驚いたのが駄菓子屋です。子どもたちの社交場となっていて、中学生も立ち寄ります。ニュータウンには、駄菓子屋はなく、今から考えれば、赤坂台マーケット内のパーマ屋の前のスペースが自分たちの遊び場でしたが、駄菓子屋のおばちゃんのような声をかけてくれる人はいなかったので、うらやましく思いました。

懐かしい思い出は、貝塚の子どもたちと私の人生を結びつけ、お互いを身近な存在と感じさせてくれるきっかけとなりました。初めて見たものや意外なものについては、生徒を質問攻めにして、いろいろと教えてもらいました。教員は、授業中、子どもに質問することが仕事のような面があります。でも、中学生くらいになると、教員の質問には素直に答えてくれません。それは、教員の質問の多くが問題を出して学力を「試す」ためにされているからだといわれています。中学生だって、大人が本当に知りたいことを質問すれば、喜んで教えてくれるのです。はじめてきた町で、よそ者である私が仲間に入れてもらうには、まず本気でその土地のことを知りたいと思うことが大切でした。

他にも、柵が壊れていてこっそり入って釣りとかできそうなため池や川、圧巻の view スポットの JR の線路わきやトンネル、学校から抜け出した子たちがこっそり集まれそうな屋根つきの自転車置き場など、さまざまな場所も発見し、後に生徒を探すときにも役立ちました。

遊んでいたり、塾へ行こうと自転車をこいでる生徒に出会ったりもしました。みんな笑顔で手を振ったり、声をかけたりしてくれます。学校とはまた違う顔をみせてくれるのです。

たったの 5 日間、家庭訪問のために校区を歩いただけで、本当に大きな学びと成果がありました。先輩の言うことは聞いてみるものですね。あの時の相棒は、今も三中にいて、三中生と先生方を助けてくれています。人生は不思議で素敵な出会いで溢れています。

【不定期コラム№31】へつづく

第三中学校ホームページ では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/